

虐待を受けている子ども、虐待をしている親との人間関係づくり

1 はじめに

子どもに対する虐待について、マスコミで報道されたり、書物も出版されたりするようになりました。最近『児童虐待』『アダルトチルドレン』という言葉もよく使われるようになっていきます。虐待には、精神的虐待・身体的虐待・ネグレクト（育児拒否）などがあり、その程度も様々です。

しかし、虐待が行われているという事実を、はっきりつかむことは難しいようです。地域の方からの連絡が学校に入ったり、虐待を受けている子どもの友達が先生に知らせたりすることは稀ですから、教師が子どもや親の様子から察知していく必要があります。

例えば、次のような様子が見られるときは、虐待を疑ってみる必要があります。

《虐待を受けている子どもの様子》

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 表情が暗く、笑顔があまり見られない。 | <input type="checkbox"/> 家に帰りがたがらない。 |
| <input type="checkbox"/> 体にあざややけどの跡がある。 | <input type="checkbox"/> 乱暴な言動が見られる。 |
| <input type="checkbox"/> 他の子とコミュニケーションがうまくできない。 | <input type="checkbox"/> 授業に集中できず、落ち着きがない。 |
| <input type="checkbox"/> 食事に対する異常な執着を示す。 | <input type="checkbox"/> 理由なく欠席することが多い。 |

《虐待を行っている親の様子》

- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> 子どもに対して乱暴な言動が多い。 | <input type="checkbox"/> 子どもの育て方に対して強固なこだわりがある。 |
| <input type="checkbox"/> 本音で語れる人が回りにいない。 | <input type="checkbox"/> 周囲に対して批判的である。 |
| <input type="checkbox"/> 夫婦仲が良くない。 | <input type="checkbox"/> 教師との話し合いを拒む傾向がある。 |
| <input type="checkbox"/> 子どものことを学校にあまり連絡しない。 | <input type="checkbox"/> 子どもの要求や気持ちをうまく汲み取れない。 |

上記のような様子が子どもや親に見られ、子どもの生命に関わるような緊急性が高い場合は、子ども相談センター（児童相談所）や最寄りの警察署などに連絡し、子どもの保護を行う必要があります。また、虐待を行っている親と虐待されている子どもを長期分離することも考えられます。

そこで、虐待を受けている子どもの中でも、比較的軽度なもの（身体的虐待がひどくなく、精神的虐待が多いもの）について、どのように人間関係をつくっていけばよいかを考えていくことにしましょう。

2 虐待を受けている子ども・虐待をしている親との人間関係づくり

子供が虐待を受けているということが分かった場合、教師は、まず次の2つについて考えていく必要があります。

- | |
|-----------------------------|
| (1) 虐待を受けている子どもと教師との人間関係づくり |
| (2) 虐待をしている親と教師との人間関係づくり |

(1) 虐待を受けている子どもと教師との人間関係づくり

虐待を受けている子どもは、精神的な深い傷を受けています。また、親の暴言や暴力を受けることはあっても、温かい愛情に包まれるような経験が、ほとんどありません。

そこで、次の2点に気をつけて教師が関わり、人間関係をつくっていきましょう。

① 母性を発揮し、甘えさせる。

虐待を受けている子は、家庭で甘えさせてもらうような経験がほとんどありません。そこで、教師は、まず、その子の存在を受け入れるような温かい愛情を持って、接していく必要があります。表情が乏しかったり、清潔な感じがしなかったりしても、その子を包み込むような母性を発揮していくのです。男性教師でも女性教師でも、母性はありますから、とにかく優しく接することが大切です。

初めは、心を開かないことも十分考えられます。しかし、それは、その子が度重なる虐待の中で人の愛情や好意を素直に受け取れなくなっているからです。教師があきらめず、根負けしないようにして、その子の要求を聞いたり、甘えさせたりしていきましょう。

② 間違っただけに対して、理由を説明して注意する。

虐待を受けている子が、自分を受け入れてもらえるようになると、徐々に心を開き、笑顔を見せるようになってきます。「この先生なら安心して、甘えてもいいな。」と感じられると、自分を少しずつ出していきます。このようになれば、その教師との間に人間関係ができてきたと考えてもよいと思います。

ただ、自分を出せる安心感から、授業中に回りに迷惑をかけるような言動が見られたり、教師に暴言を吐いたりすることもあります。そのような時、常識的な範囲を逸脱したことに対しては、本人に個別に指導していくことが大切です。授業中の態度であれば、その子のそばに行き、さりげなく肩をたたいて注意を促しましょう。休み時間や放課後などに教師に暴言を吐いたようなときは、「なぜそのような行動がいけないのか」を理由を説明して、注意していきましょう。

もし、その子が何をしても注意しないでおくと、自分の苛立ちを教師や回りの友達にぶつけてもよいと感じてしまうことも考えられます。ですから、その子の存在は受け入れつつ、間違っただけに対しては、愛情を持って指導していくことが重要です。ただ、学習意欲や学習状況に対しては、長い目で見ていくことが必要です。虐待を受けている子にとって、学習より人間関係を作っていくことの方が先決であると考えてください。

このように、日々虐待を受けている子に教師が関わっていくことによって、その子が教師に「悲しい」「つらい」などのネガティブな心の内を話せるようになれば、人間関係はかなり深いものになったと言ってよいでしょう。

(2) 虐待をしている親と教師との人間関係づくり

虐待をしている親は、自分の気持ちを話せる相手を自分の回りに持っていないことが多く、子育てに対する苛立ち・不安を抱えています。また、周囲や学校に対する批判的な気持ちが強く、教師との面接に応じないこともありますから、前年度までの情報を十分に収集することが大切です。

そこで、次のような段階をふんで、ゆっくり人間関係づくりをしていきましょう。

① 家庭訪問や電話で親の思いをつかむ。

親と面談できる家庭訪問では、時間に限りもあるので、親の気持ちを十分に聞き、認めていくことが大切

です。ただし、気持ちを話そうとしていないのに無理に質問を続けることは控えたいものです。子どもの学校での様子もできるかぎり良さを話し、問題点は少なめにします。教師が親と協力して子どもを育てていきたいという姿勢が伝わればよいぐらいに考えておきましょう。また、気になることがあれば、いつでも学校に相談してもかまわないということも伝えておくとういでしょう。

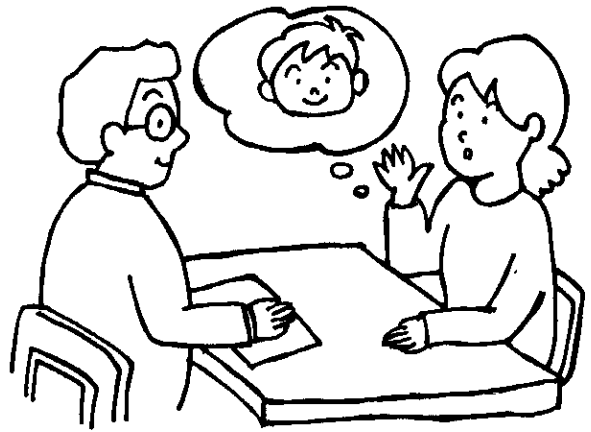
また、子どもが欠席した場合や学校での良い姿が伝えられるような場合には、教師が心配している気持ちや子どもの良い姿に対する喜びの気持ちを、電話などで伝えていきましょう。このようなことを積み重ねて、少しずつ親と話ができるような信頼関係がつけられていきます。

そして、信頼関係が少しずつできた段階で、「もしよければ、学校に来ていただいて、お子さんのことで心配されていることや今後のことについて、お話しませんか。」と持ちかけます。もし、拒否された場合は、また、次の機会を考えます。学校での話し合いに応じられた場合は、できるかぎり親の都合に合わせて、学校に来てもらいます。

② 親との面接を行う。

《面接の時間》

時間については、話を聞く教師が、最初にある程度時間を決めておくことが大切です。「今日は、この後〇〇がありますので、□□時までにしてください。」と、最初に面接の枠を決めておくことです。「何時まででも結構ですから、何でも話してください。」と教師が無制限の時間を与えても、親としては逆に話をしにくくなるようなことがあります。また、親が教師を信頼して話をするのはよいことですが、どんな状況であっても話を聞いてもらえるという依存の感情が人ならないように注意していく必要もあります。このように親との面接は、面接時間の枠を明確にしておくことが必要です。



《初回の面接の原則》

親との初回面接のときの原則は、無理に虐待についての告白を引き出そうとしてはいけないということです。初めは、子どもの最近の様子を話し、家庭での様子を聞く中で、学校としての今後の方針を伝えていきます。そして、親の話を共感的に、気持ちを分かりながら聞いていきます。もし、学校や教師に対する批判が出て、反論したり否定したりせず、そう言わずにはおれない親の気持ちに心を寄せていきましょう。また、地域や配偶者に対する恨みや愚痴などもひたすら聞くことが大切です。もし、そのときに虐待のことが話されなくても、心の中のもやもやした思いを出せただけでもよいと考えてください。

《2回目以降の面接》

2回目以降の面接も、きっかけが大切です。例えば、「子どもの変化を伝える」「専門機関に相談された場合は、どんな話をされたか」などの話題を持ちかけて、再び教師と面接できるようにします。

面接に際しては、「学校での子どもの様子」「家庭での子どもの様子」などの話題について話し合い、その後は、ひたすら話を聞く姿勢を貫きます。前回の面接と同じようなことが出ても、共感しながら聞くのです。その中で、親が虐待に関わるようなことに触れたり、親自身が子どもの頃に辛い仕打ちを親から受けたことなどを話したりするようになれば、人間関係づくりはかなり成功していると言ってよいでしょう。

ときには、殺伐とした話や厳しい批判の言葉が親から出ることもあると思いますが、そのような重い話題

が出れば出るほど、親の心の浄化になっていることを信じて、話に耳を傾けていく必要があります。教師は専門のカウンセラーではないので、親の心を癒すとか、悩みを解決するなどということは難しいことです。親の気持ちに親身になって寄り添い、話を聞き続けることを大切にしていきたいと思います。

【専門機関の紹介】

また、子どもの様子や家庭の状況を考えたとき、学校だけでは解決できないと判断された場合は、専門機関（少年センターや精神科などの医療機関）を紹介することも必要になります。そのときに、「親さんの悩みや苦しみをより専門的な立場から聞いてくださり、助言してくださるところへ行かれてはいかがでしょうか。」というような柔らかい言い方で勧めてみましょう。そして、その場で決めさせるのではなく、「よく考えていただいて、もし行かれたなら、学校に連絡下さい。」と、考える時間を与え、学校とのつながりも継続していけるようにしていきます。

ここで、母親の虐待（身体的虐待がひどくなく、精神的虐待が多い）があり、やや不登校傾向になったA子の母親との面接についての事例を見てみましょう。

【事例】

〈3年生 A子〉

○児童の実態

- ・家族状況；父（仕事で帰りが遅く1週間のうち3～4日は家に帰らない。）・母（専業主婦）と本人の3人家族。
- ・1年生の中頃、近所の人から、「家の中から激しい物音がする。夜中に罵声が聞こえる。」という連絡が学校に入る。地域の民生委員が電話で尋ねるが、母親は否定し、話すことを拒絶。
- ・A子は、表情が暗く、学習に意欲を見せない。特に算数が1年生より遅れている。
- ・3年生になり、2学期ごろからやや不登校傾向が出始め、3学期になり、毎日のように遅刻するようになる。
- ・ときどき、足や手にやけどのような水ぶくれがあったり、あざが見受けられたりする。

○対応

- ・母親へ電話で連絡し、学校での様子の良い点と心配な点を話す。また、学校へ来て今後のA子のことを話したいという学校側の意志を伝える。
- ・担任は、A子と休み時間に遊んだり、話しかけたりして愛情を持って関わる。時には十分に甘えさせる。
- ・遅刻してきたときは、担任・生徒指導主事・教育相談担当のいずれかが関わって、教室まで連れていく。

◎A子の母親との面接

1～2学期は連絡しても都合が悪いという理由で、母親が学校に話しにくることはなかったが、3学期になり、A子が頻繁に遅刻するようになってから、声をかけると学校で話すことを承諾した。

【面接①】

学校長と教育相談担当で話を聞く。A子の現状を考え、専門機関の紹介をすると共に、母親の思いをひたすら聞くという方針で相談に臨む。母親の表情は暗く、落ち込んでおり老けてみえる。

最近のA子の心配な姿を話し、専門機関（精神科）を紹介するが、「Aは医者が嫌いなので、行かないでしよう。」という母親の返事だった。「お母さんだけでも相談に行かれると、今の気持ちが楽になりますよ。また、家でよく考えてみてください。無理にはありませんから」と、話す。

後は、母親の話を聞く。「自分自身が内科系の病気で、病院通いをしていること」「今住んでいるところは近所の人冷たい。以前住んでいたところは干渉されなくてよかった。」「1年生のときにA子が交通事故にあったのは、友だちのせい。」「中学校は評判が良くない。」「近所の子どもたちへの批判。」などを話され、9時から12時30分までの相談だった。分かってきたことは、母親が自分の本音を話したくても話せる人が周りにいないということだった。

【面接②】

2日後、夕方、母親より電話があり、「今日、この前紹介してもらった専門機関へ子どもと行ってきた。その話をしたいので学校へ今、話しに行きたい。」と言う。

学校長と教育相談担当と担任で話を聞く。母親の表情が明るく、若々しくなっていた。精神科の医者より、「学校に行きたがらないことがあっても心配しないで、かえって誇りを持ってください。」と言われ、ほっとした様子であった。虐待については、話には一切出さなかった。

【面接③】

2カ月後、「昨日、専門機関に行って言われたことを話したい。」ということで連絡がある。専門機関への通院は長続きせず、久しぶりのことであった。教育相談担当が話を聞く。

精神科で言われたことを話した後、この前とは全く違う厳しい表情で、話が続いた。

- ・「学校は最近甘くなってきた。先生は早く帰り、学校へは遅く来る。」
- ・「夫はたまにしか帰って来ない。中途半端に帰ってくるなら、帰って来ない方がよい。」
- ・「A子とは、夜、毎日のように言い合いをする。腹が立つので、A子を一人残して出ていくこともある。早く離婚して、自由になりたい。」
- ・「自分は父親から子どもの頃、ひどい目にあわされた。それをA子にしていると思う。そういう父親から逃れるために結婚した。」
- ・「教師にも虐待された。中学になって仕返しをしてやろうと思った。今のA子の担任の先生や〇〇先生のような人が私の先生だったら良かったのに。」
- ・「A子が遅刻せず、休みもせず学校に行けば、私は自由になれる。A子を預かってほしい。」

このような内容だったが、その中でふと、母親が自分を見つめたり、自分の子どもの頃の先生が、A子の担任や〇〇先生のような人だったら良かったのにという悲しみの表情を浮かべたのは、心を開いているのではないかと考えられた。

母親の話から、専門機関では母親の気持ちを十分に分かってもらえなかったのではないかとということが感じられた。学校としては、今後も母親の気持ちの受容に努めていきたい。

こうして親との人間関係づくりを進めていき、親の子育てに対する苦しみや子どもに対する思い、時には親自身の成育歴の中での心の傷を教師が分かろうとしていけば、教師を信頼し、教師の助言を受け入れるようになっていきます。ただし、教師として助言できることは限られているので、専門機関と連絡を取り合っ、協力して親への対応を考えていくことが必要です。

3 学級の子どもたちとの人間関係づくり・専門機関との連携

教師は、虐待を受けている子ども・虐待をしている親との人間関係をつくりながら、次の2点についても考えていく必要があります。

- (1) 虐待を受けている子どもと学級の子どもたちとの人間関係づくり
- (2) 専門機関との連携

(1) 虐待を受けている子どもと学級の子どもたちとの人間関係づくり

虐待を受けている子どもは、他の子とうまく関わっていくことができないことが多いようです。そのため、学級の中で疎外されたり、友達ができなかつたりすることがあります。親から虐待という形で関わられているため、人とのようにコミュニケーションをとっていくかが分からないのです。

また、中には、暴力や暴言という形で、自己表現をする子もいます。こういう子たちに対して、学級の子はどのように接していけばよいのでしょうか。教師の指導の方向という点で考えてみましょう。

① 優しく接するように学級の子どもたちに話す。

まず、本人の欠席や遅刻が続くとき、学級の子に「A子が悲しい思いをしている。詳しくは話せないけど、辛いことがあるので、みんなとうまく付き合っていけないかもしれない。みんながいじめたということではないが、学校に遅れてくることもあるかもしれない。先生は、A子が学校に来て、みんなと少しでも仲良くなり、楽しい思いをしてほしい。みんなもA子に対して優しくしてほしい。」というような内容の話をして、A子に優しく接していこうという気持ちを子どもに持たせます。特別な配慮をして、A子に対して親切に接していこうという学級の雰囲気を作り育てていきましょう。

今までの成育過程の中で、愛情を受けた経験が乏しいのが現状です。特別な配慮をすることで、みんなから心のこもった言葉をかけてもらうことが必要です。

② 学級のみんなができることを考えさせる。

学級の子どもたちが教師の意図を理解し、A子に対して優しく接することができるようになったところで、教師は、子どもたちのA子に対する態度を評価しつつ、今後のA子への関わり方を考えさせるとよいでしょう。今後、自分たちがA子にしてあげられることは何かを考えさせ、一人一人が具体的にできることをイメージさせます。例えば、

- ・ 「ときどき遅れて学校に来る時があるので、A子が朝いなくなったら、A子がいつ来ても教室に入りやすいように、後ろの扉を開けておく。」
- ・ 「A子が休み時間に一人だったら、できるだけ声をかけるようにしていく。」

などのような誰にでもできそうなことで、A子のためになることを実行していくようにします。

これにより、子どもたちは、「本当に仲間一人一人を大切にすることとは、こういうことなんだ」「悲しい思いを他のだれかがしていても、こんなふうに接していけばいいんだ」ということを学び、子どもが安心して生活できる学級になっていきます。学級のみんなが安心できる雰囲気、それがA子の心の安定に欠くことのできないものなのです。

(2) 専門機関との連携

ここでは、専門機関との連携について考えてみましょう。

2- (2) の「虐待をしている親と教師との人間関係づくり」で述べたように、親とのある程度の人間関係ができた段階で、専門機関を紹介することが考えられます。

ただ、どうしても行ってほしいというような無理強いを避け、専門機関への抵抗がある場合は、次の機会まで待つことにし、強く説得することは行わないようにします。もし、専門機関へ相談に行くということになったら、教師は決心した親へ、価値づけるような言葉を伝えることが大切です。

親子が専門機関に行くようになってからは、次の点に留意して専門機関との連携を図るようにしていきましょう。

- ① 専門機関で言われたことを親から聞く。
- ② 専門機関を教師が訪問し、専門医などから直接親子の様子を聞く。
- ③ 専門機関へ学校での子どもの様子・親の相談内容などの情報を伝える。

①は、専門機関を親子が訪れた後に、「専門機関ではどんな話をされましたか。」というような言い方で、話せる範囲で親に話してもらい、今後の指導に生かすようにしていきます。

②は、親の了解のもと、専門機関に教師が行き、専門医などに親子の様子を聞くことです。プライバシーに関わるようなことは話を聞かせませんが、専門家の立場からとらえられた親子の姿・心の状態を教えてもらい、親と子にどのような接し方をしていけばよいかを聞くことは、とても参考になると思います。

①と②は、かなり行われていますが、③も専門機関との連携という点で大切にしていきたいことです。子どもについても親についても、専門機関ですべて自分をさらけ出しているとは限りません。もしかすると、学校での子どもの様子や親の話などで、大切な情報があるかもしれません。そこで、心配な点は専門機関に伝え、今後のアドバイスを聞くと共に、治療に役立ててもらうことも必要です。

4 虐待の世代間連鎖を断ち切るために

これまで、虐待を受けている子ども・虐待をしている親との人間関係づくりについて述べてきました。事例にも挙げたように虐待を受けた子どもは、自分が親になったとき自分の子どもに虐待を行うことが多いのです。この虐待の世代間連鎖を断ち切ることは容易なことではありません。教師にできることは、虐待を受けている子の父となり母となって、その子が自分自身を肯定できるように援助することです。また、ときには、虐待を行っている親の父や母の役割を演じなければならないときもあることでしょう。

そのためには、自らの辛い経験があるために心を閉ざしがちな親子の心を開き、話を聞き、気持ちを受け止めることこそが、人間関係づくりの基盤となります。